氏　　名　福井康之（ふくい やすゆき）
学位(専攻分野)　博　士（教育学）
学位記番号　論教博第 112 号
学位授与の日付　平成16年11月24日
学位授与の要件　学位規則第4条第2項該当
学位論文題目　青年期の対人恐怖

論文調査委員　（主査）教授 山中康裕　教授 岡田康伸　教授 藤原勝紀

論文内容の要旨

本論文は，青年期のノイローゼの一つである対人恐怖について研究したものであるが，対人恐怖が青年期の発達過程における青年各人の，成人へと成熟していくための通過すべき関門としての危機の一つだとも捉えることができるので，逆に，対人恐怖の研究を通して，青年期の発達の様相を逆照射して究明できるであろうという意図をも包含している。これは必要に迫られて提唱された思春期精神医学の領域と並立する青年期発達臨床心理学の立場からの一つの方法論の提起でもある。

青年期は人格の再構成の時期，つまり，第二の誕生ともいわれ，青年期の主要な発達課題には，自己の形成，または自己同一性の確立があり，必然的に，青年期には自己への意識化の問題が生じる。対人恐怖は他者の前で自己を過剰に意識する悩みであり，それは，青年期の自己意識の検討に身を挺して立ち往生している典型的な青年の姿そのものでもあるとする。そして，対人恐怖の発症や症状のメカニズム，類型と性格の関連などの解明を通して，青年期の発達の特殊性から普遍を透視し，青年期の自己形成の在り方を示唆できるのではないか，というのが本論文の主旨であろう。

第1章では，対人恐怖の定義と症状の特徴を述べ，対人恐怖の実態についての諸相を概観している。第2章では，従来からの対人恐怖の分類を整理し，軽症と重症の類別と類型による従来の分類を妥当なものとして提示している。それに従って，赤面恐怖から体臭恐怖までの5類型について，類別的にそれぞれの特徴と，事例からの考察をしている。第3章では，対人恐怖の形成の心理規制についての諸説を論評し，「メドゥサ・コンプレックス」なる説を提唱している。

第4章では，自己理論の検討を通して，対人恐怖のメカニズムを究明しようとの意図のもとに，自己意識の起源から青年期の概念的自己意識の発達や，身体との関連を概観しており，自己意識の起源から青年期の概念的自己意識の発達や身体との関係を見，さらに認知発達的な視点からの「自己概念」や，それに関連して「自己評価」と「自尊感情」についても触れている。特にヒギンズ，エプシュタイン，力ヴァーとシャイアーらの自己統御理論を，対人恐怖と関連づけて紹介し，「自己概念の二重構造説」を提唱する。さらに，自己統御理論から，対人恐怖は他者からの過剰な入力情報によって，自己制御システムの調整機能が破綻に瀕している状況としても把握しうるのではないかとするのである。

第5，6，7章では，学会誌発表論文を踏まえて，従来の対人恐怖の5類型とは別に，新たに出現してきた「ふれあい恐怖」が，別種として記載できることを，中学・高校・大学生への質問紙調査，合計約2500名のデータを因子分析して実証している。さらに，自己愛，強迫，対人回避傾向尺度により，各類型の性格特徴の違いを明らかにし，性別，年齢差の異同を比較している。また，新たな軽症の対人恐怖として，重症例の「醜貌恐怖」に比肩できるものとして，「外形恐怖」という類型の存在の可能性を示唆している。これらから，時代の変遷により，青年たちの生育環境が変化して，対人恐怖のタイプや症状の在り方が異なってきていることを示し，現代青年の自己意識の在り方も変化していることを示唆する。従って，青年期の理解と援助の方法も，修正ないしは変換の必要がある，と説くのである。

終章では，他者と一体化していた自己が，青年期に容体自己の意識として分離し，再び，次元を異にした関係性において他者と一体化していく，成人への成熟のプロセスを視野に取り込みながら，対人恐怖から自己実現に至る道程を論じている。対人恐怖症者が悩む自己と次元を異にする「自己を越える自己」，すなわち，「本来の自己」とは何かについて，若干の考察

をおこない，対人恐怖症者には，我執としての小我（self）から脱却して，大我（SELF）を実現するという，人間としての本来の在り方へと向かう絶好の機会が到来している人なのでもある，と強調するのである。それは，対人恐怖症者こそ，見られている自己（self）に悩み，弱気になっていても，一方の強気の自己が現実と直面する勇気をもっており，自己変革を強く望んでチャレンジするところが，他の青年の病理像とは異なるからだとするのである。彼らが，周囲からの適切な援助を得て，自己実現へと回心（conversion）する可能性を促進することこそが肝要である，とするのである。従来，対人恐怖に関心を抱いてきた研究者はほとんど精神科医であったため，対人恐怖を症状としてのみ位置づけ，症状の緩和のみを治療目的にしたため，その背後にある人格転換の機制にまで関心を寄せなかったことを指摘し，発達臨床的な視点の導入こそが必要なのだと強調する。

また，具体的に事例に基づき論証せんと，赤面と吃音で来談した事例を自験例として提示し，その10年後のフォローアップを経た報告に基づき，自己を悩む対人恐怖は，本来の自己を求める自己実現への旅立ちの必然の機会となることを示そうとしている。そして，「ペルセウス神話」を例証として，現代社会では形骸化してしまっている青年期のイニシエーションに替わるべき経験を，個人が意図的に選択していく必要性を述べ，青年が成人としての成熟を遂げるための援助として，イニシエーションの代替となる，青年期への援助システムの在り方を検討し，社会制度として組み込むことの必要性を主張して，本論の結語としている。

論文審査の結果の要旨

本論文は，青年期神経症の一つとされる「対人恐怖」について論述したものである。

まず，著者の主張である，「対人恐怖が青年期の発達過程における青年各人の，成人へと成熟していくための通過すべき関門としての危機の一つだとも捉えることができる」点，および，その延長上の「対人恐怖の研究を通して，青年期の発達の様相を逆照射して究明できるのではないか」という意図が妥当であるか否かが，まず検討された。つまり，「青年期とは人格の再構成の時期であり，自己の形成，または自己同一性の確立にあたって，自己への意識化の問題が生じること」が確認され，評価された。そして，著者の主張する，「対人恐怖は他者の前で自己を過剰に意識する悩みであり，それは，青年期の自己意識の検討に身を挺して立ち往生している典型的な青年の姿そのものでもある」という視点も評価された。対人恐怖症の発症や症状のメカニズム，類型と性格の関連などの解明を通して，青年期の発達の特殊性から普遍性を透視し，青年期の自己形成の在り方を示唆できるのではないか，という本論文の主旨について，その方法，事例の提示，論証の仕方などについて詳しく検討された。問題となったのは，本論文の方法論的思惟の検討が幾分不足している点であった。つまり，理論研究なのか，文献研究なのか，事例研究なのかの位置づけが曖昧なところがあり，特にその統合的視点がやや脆弱であることが指摘された。

しかし，対人恐怖の定義，症状特徴，対人恐怖症の実態についての諸相などの文献検討の周到さと克明さは十分評価しえた。ただし，引用文中のドイツ語表記の問題や，仏教関係からの引用には，少しく不注意な点もあることが指摘され，今後の出版等においては訂正されるべく要請があった。

ついで，対人恐怖症の，軽症と重症の類別と類型による分類に基づき，赤面恐怖から体臭恐怖までの５類型の各々の特徴とその考察は十分評価された。そして，従来の対人恐怖症の形成の心理規制に加えて，「メドゥサ・コンプレックス」説が提唱されているが，この適切性も評価された。

また，自己理論の検討において，自己意識の起源，概念的自己意識の発達，身体との関連，認知発達的な視点からの「自己概念」「自己評価」「自尊感情」などについて，ヒギンズ，エプシュタイン，カヴァーとシャイアーらの自己統御理論を，対人恐怖と関連づけて紹介した点も評価され，「自己概念の二重構造説」が検討され，その上で，自己統御理論から，対人恐怖症は他者からの過剰な入力情報によって，自己制御システムの調整機能が破綻に瀕している状況としても把握しうるのではないかとする著者の主張の是非が論じられた。そして，「ふれあい恐怖」が，従来の５類型に加えて，別種として記載できるのではないかとの一連の実証研究においては，質問紙そのものの妥当性や統計的処理の仕方でいくつかの問題点が指摘された。しかし，新たな軽症の対人恐怖症として，重症例の「醜貌恐怖」に比肩できるものとして，「外形恐怖」という類型の存在の可能性を提唱したことは高く評価された。

なお，時代の変化とともに対人恐怖症のタイプや症状の在り方も異なってきていることや，現代青年の自己意識の在り方が変化していること，従って，青年期の理解と援助の方法も，修正ないしは変換の必要がある，と説く著者の主張は十分納得できると評価された。

また，対人恐怖症者が，実は，人間としての本来の在り方へと向かう絶好の機会が到来している人なのでもある，とする捉え方，つまり，対人恐怖症者が，自己変革を強く望んでチャレンジするところが，現代の他の青年の病理像とは異なるという点の指摘と，周囲からの適切な援助を得て，自己実現へと回心（conversion）する可能性を促進することこそが，その治療において肝要である，とする著者の主張は高く評価された。しかし，例証として提示された，赤面と吃音で来談した事例は，事例報告というにはその記載がいまだ不十分であり，さらに，対人恐怖症の心性なのか，吃音の心性なのかがあいまいな点など臨床的観点からみて幾分考察不足の部分があることなどが指摘された。しかし，対人恐怖が本来の自己を求める自己実現への旅立ちの必然の機会となることを示そうとした意図は十分評価された。そして，ここで提示される「ペルセウス神話」が，対人恐怖症の治療に際して果たし得る意味についても検討され，これはなかなか適切な着眼であることが評価された。

以上，いくつかの問題点を含むものの，それらは今後の研究発展において期待されこそすれ，博士論文としての瑕瑾ではあるものの，その価値をそこなうものではないと考えられた。よって，本論文は博士論文としての水準に十分達していると認められた。

よって，本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また，平成16年10月５日，論文内容とそれに関連した試問を行った結果，合格と認めた。